

2 年 1 組

いのちをふかす教室 ～むしパンづくりから、命を育てる挑戦へ～



「失敗だ～大失敗だ～」～未知のむしパンづくり～

4月「去年は作ったことのないものを作りたい!」というTくんのひと言から、未知のむしパン作りがスタートしました。今回はむし器を使わず、フライパンで挑戦。ところが…「大変なことになってる～!」むし途中に蓋を開けた子が叫びました。生地がふくらみすぎてカップからあふれ、フライパンの水に流れ出ていたのです。どの班でも同じ現象が。「失敗だ～!」「なんで?」と疑問を抱いた子どもたちは観察を始め、強火にすると水が急に沸騰し、カップが押し上げられると気づきました。「今度は弱火でやってみたい」と火加減について意見が出ました。

翌日、Yさんが「家ではこのザルを使ったよ」とむしザルを持参。「うちにもあるよ!」と、次々と集まるむしザルたち。本当にうまくいくのか?——名付けて、ザル作戦!



〈あふれだしたむしパン〉

「水の量はどのくらい? 弱火ってどのくらい?」

子どもたちは「中が見えるようにしたい」と話し合い、透明な蓋の鍋を使って、むしパン作りに挑戦することになりました。水を入れるとき「どのくらい入れればいいのか?」「入れすぎるとカップに入っちゃうよ」「でも少なすぎたら蒸せないよね」と、みんなで考え始めました。するとある班が、鍋に水を入れ、ものさして水の深さを測り始めました。「2cmだ!ざるにちょうど当たるくらいの水になるよ」「これで20分もつかやってみよう」それを見た他の班も測り始め、「2ってどこ?」「ここが目盛りの2だよ」と、水があふれないように調整していました。

また火加減についても「弱火ってどれくらい?」「炎が小さくないとダメだよ」と、声をかけ合いながら火力を調整。以前のようにただ火をつけるのではなく、よく考えながら進める姿が見られました。「ふつつつしてきたけど、水はあふれてないね」「これなら大丈夫そう!」さあ、いよいよむしパンリベンジのスタートです!



〈2cmってどこ?〉



〈弱火ってこのくらい?〉

「みて!みて!ちゃんとふくらんでる!」～むしパンリベンジ～

5月、リベンジに挑んだ子どもたちは、水の量や火加減に気をつけながら、手際よくむしパンづくりを進めます。「今度はあふれてこないよ」「少しずつ膨らんできた気がする」と、ドキドキしながらむしあがり待つ子どもたち。ふたを開けた瞬間「うわあ!」「きゃあ!」と歓声があがり「おいしそう!」「ふわっふわ!」と大喜び。味見をして「大成功!」と満面の笑みがこぼれました。前回の失敗を経験したからこそ「どうすればうまくいくのか?」と考え、工夫する姿が見られました。失敗は成長のチャンス。自ら学び、乗り越える力が育っています。



〈むしパンリベンジ大成功〉

「にわとりさんを育てたら」

むしパン作りのリベンジを振り返ると「おいしかった」「大成功」「形がきれいにできた」と満足そうな声があがりました。一方でGくんは「ぼくはあんまりおいしくなかった」と発言。「セブンのむしパンの方がふわふわで黄色い」と話すと、他の子どもたちも「卵が多いのかも」「卵の味がするよね」と、材料や味の違いに注目しました。「でも卵ってそん

なにに使えないよね」とGくんが言うと、「じゃあ、にわとりを育てたら?」とKさんが提案。そこから「卵がいっぱい食べられる」「にわとりって飼えるの?」「卵でたくさんむしパンをつくりたい」「売ることまでできるかも」など、次々にアイデアが広がりました。にわとりの体や食べ物、住むところなどについて載っている本のページをコピーして持ってきてくれたり、本で調べたことをノートに書き写して見せてくれたり、わかったことを発表してくれたりする子たちが出てきました。

6月、そんな子どもたちの様子を見た保護者の方から田中ファームさんをご紹介いただきました。ブドウやヤギミルク石鹸、うこっけいの卵などを生産・販売する農家です。田中さんにお話を聞くと「附属小の子どもたちが、うこっけいのことを知ったり、うこっけいの卵のおいしさを知ってくれたりしたらうれしい」と仰っていました。

「死んでしまったら悲しい」「でも、自分たちの努力で変わるよ」

子どもたちにうこっけいについての話をしたあと、一人ひとりが今の気持ちを伝え合いました。「うこっけいさんの卵でむしパンを作りたい」「成長の様子を見たい」「うこっけいさんと暮らしたい」と前向きな声が多く上がる一方で、「死んでしまったら悲しい」「ストレスが心配」といった不安の声も聞かれました。1年生の頃、ウサギのくいちゃんと暮らしていた子どもたち。くいちゃんは、1ヵ月で亡くなってしまいました。くいちゃんの死を経験している子どもたちにとって「また死んでしまったらどうしよう」という気持ちはとても大切なものです。

話し合いは何日も続きました。そんな中、Hくんが「でも、自分たちの努力で変わるよ」と言ったことで、教室の雰囲気が一変しました。「自分たちががんばれば大丈夫」「寒さに気をつけてあたためてあげよう」「だっこもやさしくしよう」「みんなて協力すればできる」といった前向きな意見が次々出てきました。「死んでしまうのは悲しいけれど、それでもチャレンジしたい」「勇気を出して大切に育てたい」と話す子どもたちの姿から、命と向き合うこと、仲間と協力すること、自分たちの力を信じることの大切さを強く感じました。

「いのちの卵がちゃんと育つように準備しなきゃ」

7月、子どもたちは、田中さんからもらう卵を「いのちの卵」と呼び、いのちの卵を迎えるための準備をはじめました。うこっけいの飼い方について本で調べたり、以前ニワトリを飼っていた6年生にアンケートをとって準備しておくものを聞いたりしました。6年生の経験から「ふ卵器は安全なところに置いて、動かしちゃいけない」「ひよこにはあたたかい部屋が必要」など多くのことを学びました。ふ卵器のテストもしました。「いのちの卵がちゃんと育つように準備しなきゃ」とみんなで力を合わせて楽しみながら準備を進めています。



〈飼い方を図鑑で調べたり、アンケートをまとめたりする子どもたち〉

教師の思い ～命と向き合う～

わたしは、4月から、2年1組の子どもたちとにわとりさんとの暮らしを思い描いていました。調理活動を楽しむ子どもたちの姿を見て、調理を深めていくのは楽しそうだなと思う一方でまた、くいちゃんに思いを寄せる子どもたちの姿を見て、命がある暮らしをつくっていきたいと思っていました。そして、命が亡くなることを経験した子どもたちと一緒に、命が生まれること、命をいただくことを経験したいと考えていました。

わたしたちは、日々命をいただいて生きています。鶏や豚、牛や魚、これらの命を食べることがあまりにも当たり前になっていて、立ち止まって考えることすら少なくなっています。うこっけいの飼育を通して、子どもたちは命と向き合うことになるでしょう。卵から命が生まれる瞬間、生まれてこられなかった命、自分たちの手で育て、目の前で成長していく命。そして、育てたうこっけいが産む新たな命である卵。その卵を育てるのか、食べるのか。子どもたちは、その選択を迫られることになります。そのとき、何を感じ、どう考え、どのような決断をするのでしょうか。卵の命を通じて、自分自身の命についても考えたいと思います。わたしたちの命は、数えきれないほどの命のつながりの上に成り立っています。命は一度失われてしまったら、二度と元には戻りません。だからこそ、その重みや尊さを、子どもたちと共に、心で感じていきたいです。